

日本生物學會誌

第 14 号



日本生物學會

1982年 10月25日

第 14 号

も く じ

高 隆三：あ る 夏 の で き ご と	469
細 見 彬 文：インド・コーチン大学訪問記	470
奥野 良之助：大 学 教 授 の モ ラ ル	482
奥野 良之助：＜書評＞伊沢紘正著「ニホンサルの生態」	496
「生物学誇大辞典」：こんちゅう	501
「日本生物学会」設立趣意書.(再録)	502
「日本生物学会誌」投稿期定(改正)	503
編 集 局 だ よ り	504

ある夏のできごと

高 陸

ある県での話。

数年前、県教育委員会は「教職五経年研修会」を文部省のいっけどおりに初めて開いた。（教員になって五年すぎた者がうけなければならないつまらない講習会） 反対闘争ということで、私も当日のこのこと会場に出かけていった。そしたら「君、ピラをまいてくれ」といわれ、ホイホイと気のいい私は会場内でピラをくぼりはじめた。そしたら中年のおじさんがとんできて「こら、おまえ、なにをしている」という。私は「何で反対しているかわかるようにくぼってるんです」と答える。すると「これが目にはいらんのか」と壘を指さす。そこには「ピラの配布を禁ず」と書いてあった。「はい、そんなものは読みませんでした」というと、「ここではピラをくぼってはいかんと決まっとる」とおこる。そこで、「だれが決めたのですか」ときくと、「わしが決めた」とおっしゃる。そこで、私は、「なんであなたの決めたことに私がしたがわなければならんのですか」ときいたら、本当にそのおじさんはおこってしまった。

私のような者に対してまじめにおこる人はだれだろうとあとでしらべてみたら、その人は「教育次長」というエライ人だった。しばらくしてその人は「教育長」となった。最高にエライ方だ。

「ワシが決めたからおまえしたがえ」と、今度いっわれるかと心配している。こういう人が教育長となったりして、明日の日本はどうなるのか、実のところ本気で心配している。

インド・コーチン大学訪問記

細見 杉文

私は1971年からこれまで4回インドを訪れました。この記録はその最初のもので、最も強い印象を受けた時のものです。話は少し古くなりましたが、インドの状態は前も今もほとんど変化しておりません。はじめて驚きの目で見たインドの印象をここに記します。

私のはじめて外国へ旅立ったときの印象は今も強く胸にやきついている。あのときのうれしさと不安が今もはっきりと思い出される。

旅立ったのは1971年12月20日だったが、それまでがなんとも待ち遠しかった。学校のポプラの木の葉が黄色くなり、そしてちらちらとまいおりのをみて、あの木の葉が全部ちり落ちてしまうころに自分は旅立ちできるのだというそんな気持ちで、毎朝学校へ通う道でポプラを見た。だから今でも、木の葉がちるころになると、あの待ち遠しかった日々を思い出すのである。

なぜ外国へ行きたいと思ったのだろうか。そのころ、私をとりまく人間関係がきわめて悪かった。面白くない毎日が続いていた。研究はなかなか思うようには進まなかった。こうした圧迫が私を外国へとおいたてたのだと思う。

たむしようにインドに行きたかった。なぜインドでないといけなかったのか。それまで自分の心に、発展途上国へのあこがれにも似た気持ちがあった。発展途上国、とりわけ南北問題というのが非常に大切な問題だという意識があった。その代表としてインドを選んだ。

行き先は自分の研究との関係から、ケララ州のコーチンにした。コーチンにはコーチン大学海洋科学科があるということから、ここでインドの生物学の私に関係する文献をあさりたかった。

そして、実のところケララ州は共産党州政府ができていて、インドの中でも特に興味を引かれるところだったのである。

大阪空港でインド航空のジェット機に入ったとたん、もはやそこは日本ではなかった。飛行機は南の空気をそのまま運んできたようにむっと暑かった。そしてハエが一匹機内を飛んでいるのを見て、「ああ、ここはもはやインドだ」と、そう思わせた。それに機内に一步入ると日本語は全く通じなくなっていた。飛行機に一步ふみこんだとたん、そこは外国だということをしみじみと思った。

飛行機の窓からはよく晴れていて日本列島の地図の上を飛ぶのがよくわかった。鹿児島をぬけ、大隅半島を出たとき、ああ私は始めて国境線を越えるのだという思いがわいてきた。(沖繩をお忘れじゃございませんか。 会長)

香港を過ぎ、機がバンコックに向ったときに、うしろの席からきれいな女性が私に話に来た。飛行機の中の乗客は10人程度でがらすきだった。この女の人は心細くなって来たのだろう。どこへ行くのかと聞くと、ポンペイだと言っていた。日本に居れば、こんな美しい女性が向うから声をかけてくることなど絶体になくことである。このときは、ざまを見やがれと言った気分で、大変心ゆかいてあった。

機がベトナムを越えるときは2つの気分が交さした。下の密林の下では、ベトナム解放戦線とサイゴン政府軍が戦っている。私は気持よくソファにもたれている。一つは、苦勞をしている解放戦線の兵士に対し、自分はこれでよいのかという気持であった。と同時にこの飛行機も時によれば、ロケット砲の目標になるのではないかという気持におそわれたのである。

機がバンコックに着いて、2日間をバンコックで過ごすことにした。目的は、日本に留学しているとき知り合ったチョクチャイ・セナオン氏で、彼はカスケトサルト大学の助教授をしている人である。彼は京大の白浜の臨海実験所に2年間居たのだが、私が白浜を訪れたときに内海富士夫先生から紹介された人物であった。彼とベトナム問題やカンボジア問題を話合おうとしたのであるが、彼の頭の中には、そんな問題意識は全くなかった。あまり面白い人物ではなかったが、バンコックで知っている唯一の人物だったので訪ねることにした。

ラマホテルで一泊して、彼の居るライスフィールド・センターを訪ねた。これにはラマホテルで接客係をしている男が案内してくれることになった。その男には一日案内をしてくれれば10ドル支払うという約束をした。今から思うとずいぶん高い案内料を払ったものであるが、お金の

効果があつてか、非常に親切に案内してくれた。いくつかの有名な寺院を案内してもらった後、ライスフィールド・センターを訪ねた。

その場所はバンコックの中心部からはかなり遠いところで、ドンムアン空港を北へ10キロほど行き、運河にそって20キロほど東へ行ったところに位置していた。見渡す限りの田園地帯で、高床式の家がところどころにあり、運河せいにはスイカが収穫されてならべられているのが眼についた。また水牛が泥水の中につかって頭だけ出しているのも眼にして、これが水牛というものかとも思って感心した。

チョクチャイ氏ははだして私を迎えてくれた。それにシャツのそでが破れていた。にこにこしながら迎えてくれたが、はだしてあるのには驚かされた。彼は私のために特別のエビフライをごちそうしてくれた。エビは6〜7センチのもので、それをメリケン粉のしるをつけて油であけただけの粗末なものであった。エビはどこで採ったのかと聞くと、前を流れる運河で採ったと言っていた。これならここに住んでいて飢えることはない。運河でいくらでもエビとりをしてそれを食べていればいいのだから。チョクチャイ氏の隣の家の奥さんが、竹筒の中に米を入れ焼いたものを私にくれた。私に食べろと言う。私は竹のふちをはいで、中にある御飯を食べてみた。甘い味のついた御飯が竹筒の中ででき上っているのを食べながら、ああ、ここはインドシナなのだという強い感傷が胸にこみ上げてくるのを感じた。竹筒御飯はベトナム映画を見たとき、寸景として出てきたものを憶えていた。

チョクチャイ氏の家にも隣の家にも壁に白い小さなヤモリが百匹も二百匹も群をなして電燈のところへへばりついてた。電燈に近よるこん虫を食べに集って来ていたのである。夕刻になるとトッケイ、トッケイと鳴く声が出た。このトッケイのことは中学生のころ、本で読んでいたので一応知ってはいたが、声を聞くのははじめてだった。たしかトカゲかヤモリの仲間だったはずである。チョクチャイ氏の家の中に大きな黒いヤモリがいたので採集し、ホルマリンづけにして持ち帰ることにした。網をかぶせようとする、シャーシャーと大きな口を開いておそいかかってくるふりを見せたのが気味悪かった。

ドンムアン空港でインド航空におくれ乗りそこなってしまった。チョクチャイ氏が世話をしてくれ、ボンベイ行の TWA に乗りつぐことにした。ボンベイについては夜の11時ごろだった。ボンベイというのは大都市のはずなのに機上から見る光の風景はまことにさみしいものであった。大阪や神戸の夜景を見なれているものにとっては、あちこちにちらちらとする光を見るとさみしい感じがした。

ボンベイ空港の税関はまことにきびしいもので、カメラの種類をパスポートに記録した上、電算器を持っていないかをしつように聞いていた。空港の玄関口はすさまじい限りであった。き

たないシャツを身にまとったハダシの男たちが何十人も待ちうけていた。私が玄関を出るなりと
りかこみ、私の二つの荷物をうばうようにしてタクシーへ運んだ。しかも別々のタクシーへ。片
方の荷物は私がとりかえし、一方のタクシーへ持ち込んだ。そうすると運び屋が二人タクシーへ
乗ってきた。そして1ドルよこせと言い寄って、タクシーから降りようとしな。1ドルは高い
から10セントにせよと言っても言うことをきかない。どうしても1ドルよこせという。仕方が
ないので1ドルやることにすると、2人は喜んで降りていった。

タクシーはひどい代物だった。ドアのロックボタンがはずれ針金がむき出しになっている。
座席のカバーは破れてわらがはみ出している。メーターはこわれて料金はわからない。だから料
金は運転手と私の間の交渉になる。しかし、運転手が5ルピーと言ったのか、5ドルと言ったの
かよくわからなかったので、私は5ドル渡してしまった。運転手がものすごく喜んだので、私は
しまったと思ったが、外国で一人で旅をするのはずい分ソンをするものだと思った。私のこの時
の英語の力は、はなはだ心もとないものであった。タクシーはときどき止った。ガソリンを入れ
ると言っては止まり、なにか言ってはまた止った。私はそのつど、タクシーの運転手が仲間をつ
れてきて私をおそうのでないかとおそれた。しかし運転手はチョコレートを買ってきてお前も食
えと一枚くれた。しかし、インド製のチョコレートは一口、口に入れてただけでもう食べたいとは
思えるようなものではなかったので、ポケットにしまいこんでしまった。道の両わきや、車の分
離帯にごろごろと木材のようなものがころがっているのが、タクシーのヘッドライトに照らされ
て見えた。よく見るとそれは人間が5メートルほどの間隔で路上にねているのであった。空気は
わらが腐敗する臭いがしていた。

私がついたタージマハールホテルは眼を見はらされた。玄関を入ると4人のすごい美人がサ
リーをひらひらとなびかせながら歩いていた。私の眼には天女のように見えた。広いロビーに美
しくみがき上げられた大理石の床、インド王朝風の壁、すべてがみごとなものであった。ポー
ターが私の荷物を手にフロントへ案内した。ボーイが連れていった部屋は、これまたすばらしいも
のであった。縁にししゅうのある壁、ふあついじゅうたん、そしてソファのならべられた応接
室、広いベッドを横たえた別の部屋、また、バス、トイレ付きの大理石でできた部屋など、3室
が私一人のために用意された。もし一国の王がとまったとしても、この部屋なら不似合ではない
であろう。私は一夜だけ国王級の待遇を受けることになった。(窓からのながめもよく、ボンベ
イの中心街が見えた。その中にボンベイ博物館がきわだって美しくそびえていた。) 部屋には、
私の始めて聞くシタールを鳴らす独得のインド音楽が低くながれていた。このホテルに流された
インド音楽にふしぎな魅力を感じたのである。

ボンベイ博物館からイカイの論文が出ているのを知っていたので、博物館に文献の所在をた

ずねた。そうすると電話口に出た人が、あなたは今どこに居るのかと聞くものだから、所在を言うと館員がすぐたずねてきてくれた。そして、今その文献はないが、あなたは遠い国から来た人だから、市内を案内してあげようと言って、タクシーで市内の名所2カ所へつれて行ってくれた。一つは、銀でつくられたジャイナ教の寺院であった。お寺のほとんどが錫銀作りなのには驚かされた。

もう一つの名所は売春街であった。もう日もくれていた。大きな売春街をタクシーで見て回った。売春婦たちは鉄ゴウシのおりに入れられていた。鉄ゴウシの中にはうす暗い電燈が下がり、売春婦が2人、3人と座ったり立ったりしているのが見えた。また鉄ゴウシのない売春宿にはべらべらとしたカーテンが入口に下がり、そこに女が立って客を待っていた。通りには波のように男たちが歩いていた。タクシーの前に立ちふさがり、タクシーを止めて窓をたたいて「降りろ、いい女がいる」などとさげふボン引きもいた。タクシーのロックがきかないものだから、タクシーに乗り込んで来て私の手を引くものも居た。売春街は非常に長く大きな通りだった。私はあまりのすごさに興味をひかれ、タクシーを降りて歩くことを博物館員に提案した。しかし博物館員は、降りると危険だ、多くのスリがいるし、強盗もいる、タクシーの中から見るだけと言ひ、絶体に降りてはいけなと私をさとした。私の見たこの売春街はまさにこの世の地獄であった。

タジマハールホテルの前には数人の乞食が群がっていた。もっとはなれたところにはもっと多くの乞食がいた。私が一步でもホテルのエリアから外にふみだしたなら、わっと乞食たちは私をとりまくのである。そして金をくれたのクツをみがかせろだの、周囲からしつこくせまってくる。まわりをかこまれているから動きがとれなくなる。乞食はみな三〜四十代の男たちでやせているが、皆一様に目つきがきびしい。恐しくなってホテルのエリアに逃げこむと、乞食たちはけっしてそこには入ってこない。それは、ホテルの玄関口にターバンを巻いた大男の番人が立っていて、もし乞食が一步でも入ろうものなら、大声でとられる仕組になっている。子供の乞食がいたずらっぽくエリアをさっとかけぬける。すると大男のば声かとぶ。ホテルの内と外では天国と地獄の差がまざまざと展開されている。

ボンベイ空港からは国内線のインディアン・エアラインに乗りかえた。これは小型のプロペラ機であった。窓から見える風景はちょっとかわっていた。海岸平野が10 Kmほどある。その向うは急にそそり立った1000 mばかりの断崖があり、断崖の東はまた平らな土地になっていた。飛行機は南に向けて飛んでいた。海岸平野は緑で細い田舎道があちこちをぬっているのがはっきりと見えた。しかし断崖の東は茶色っぽい土地が広がり乾燥しているのがよくわかった。日本を上空からながめるのとは全く違った風景であった。稲田は谷間せいに手のひらを広げたような形で、くっきりと周囲の風景と区別できた。

私の横にすわった人はインド海軍の若い少佐であった。私と年もそれほど違わなかった。彼も私と同じくコーチンに行くと言っていた。他の乗客も全部インド人で、日本人は私1人だったようである。インド人達は外国からの帰りの者が多かったようである。手に手にポータブルラジオを持っている人が眼についた。私の前の乗客が、手に入れたラジオがうれしいのか、小さな音でラジオをならしていた。しかし飛行機の中でラジオを使うのは危険きわまりない行為である。計器に混乱を与えて飛行に影響を与える。日本の飛行機ならこのことをステュワーデスがあらかじめ注意をする。しかし、インドのステュワーデスは何も言わなかった。だから私が注意してやった。しかしインドで飛行機に乗れる人達は特別の恵まれた階層の人達である。私の話した乗客の1人は高等学校の校長だと言っていた。そうした人々を乗せて、飛行機は無事コーチン空港についた。

空港に出迎えてくれたのはクリアン博士の一行だった。博士は自分の自動車で来ていた。博士につれられて私はコーチン大学までつれて行かれた。コーチンはヤシの林にうまった美しい小都市であった。コーチン大学海洋科学部の客員研究員の宿泊室に案内された。部屋は古いベッドが1つと机とイス2つの裏にそまつな部屋であった。しかしクリアン博士には、いい部屋を与えていただいて有難うと礼を言っておいた。

クリアン博士は大学の中では真にいばっていた。学部長であったせいでもあるが、皆、博士の前に出ると直立不動の姿勢をとっていた。博士は私が若いせいもあるので可愛がってくれ、自動車であちこちとつれて行ってくれた。私は博士に、日本製の高級万年筆を1本プレゼントした。そうすると、博士は日本製の3色ボールペンを見せ、どうかと言った。私は、それは日本ではオモチャであると言ってやると笑っていた。

客員宿泊所に1人ているのは面白くない。この宿泊所は2階にあったが、すぐその下が院生や大学生の娯楽室になっていた。娯楽室では学生達が1 m四方の大きな盤の上で玉はじきをして遊んでいた。私は土産に持って行ったボールペンを10本ほど用意して、その部屋をこんばんわと言いながら訪ねた。異邦人が急におどずれたものだから皆おどろいて遊びをやめ、私の周りに集ってきた。私は1人1人にボールペンを渡して自己紹介をすると、皆も自己紹介をしてくれた。私はそれぞれの名前をノートに書きとめ、顔の特徴を記した。それを見た学生の1人が、これはなんの意味かと聞くので、『立派なヒゲ』と書いたのだと言ったら大わらいになった。皆、日本のことについて色々聞いていた。それから毎晩のように彼らと話し合うようになった。

親しくなった人達は院生の P. S. Joseph、それにフーベンドラナート、それから、貝の研究をしているというのでクリアン博士が紹介してくれたモハメッド・サリー氏などである。ジ

セフとサリーが、ミドリイガイがいる所へつれていってやると言っ、1日がかりでニャラマケルというコーチン近くの漁村へ行ったことがある。ここはヤシが見事に茂り、そのヤシ林の中を運河が流れていて、実にいいところであった。しかし海岸のミドリイガイは非常に数が少なかった。それは漁民がまずしくて、これらの貝を食糧にとりつくしていたからである。わずかのミドリイガイとホトトギスガイを採っただけに終ってしまった。海岸は遠浅の泥の浜で、泥は有機質に富んでいた。ミドリイガイは護岸用につくられた石の積み上げられたところだけに生息していた。

クリアン博士に客員宿所に案内されたとき、同時に1人の少年を呼んで私に紹介し、「これが君のサーバントだから、ベルを押せばただちにやってくるので、君の用のあるときはこのサーバントを使え」ということだった。私に召使いがついたのは私の生まれてはじめての経験であった。上半身はだかで、腰にドーティだけを巻いたはだしの15才前後の少年だった。クリアン博士が部屋から去ると、少年は私に「シャツをくれ」と言った。金っばかりで、はじめて口を開いて出たのがこの言葉である。多少私もびっくりしたが、私はカッターシャツは二枚しか用意していなかったの、やることはできなかつた。しかし、これから何日も私の世話をしてくれるのだから、何か好意的な回答を用意しなければならない。私はインドでのシャツの値段を想像した。おそらく300円くらいだろうと。それなら10ルピーをやればいいと計算して、「シャツはないが、10ルピーやるからシャツを買ってこい」と言って金を渡した。少年は喜んで部屋から出て行った。次の日の朝少年に会うと、格子じまの入った立派なシャツをちゃんと着ていた。

この少年の月給は15ルピーだと院生が教えてくれた。月に15ルピーとは450円ということである。もちろん食事はついていのだらうが、いくらなんでもこれでは生きていけまい。少年が多少あわれに思えたが、インドではこれが常識なのである。450円といえば日本ではウドン2はい分かコーヒー3ばい分の値段である。彼はその15ルピーでどのように生きているのか不思議に思えた。

私はときどきベルを押してその少年を呼んで用を言いつけた。湯をわかしてこい、とか、洗たく物を洗たく屋に持っていけ、とか、という日常なことである。しかしここで問題があった。日本茶が飲みたいので湯をわかせと言いつけても、湯がわくには30分以上もかかるのが普通だった。私は日本に召使いなどいないし、また日本では召使いというようなシステムさえも大過去のものとなつてしまっている。湯がわかしたければ自分で、湯わかし器のコックをひねればよい。自分の望む湯はものの2分もたたないうちにやかん一ばいになっている。インドでは召使いを使うことができる。この気分は貴族的ではなはだ使う方にとってはいいものである。しかし、湯ひとつわかすのに30分もかかり、しかも灰まじり湯が作られてくる。召使いのシステムは実は

便利なようで不便なものなのである。やはりこれは過去のものでしかないようである。

毎日の部屋の掃除は召使いの少年の仕事ではなかった。掃除人はまた別の女性がいて、ほうきをもって毎日1回部屋をはきに来た。その女性に写真をとってやろうというと、笑いながら部屋を逃げ出してしまった。こんなことを言われたのは、その女性にとってはじめてだったのである。

食事は私はたいがい街に出てレストランで食事をした。しかし、学生食堂で学生や院生とともに食事をとったこともある。しかしそれは非常に粗末なものであった。やわらかいせんべいのようなチャパティ数枚とカレーじる、バナナが2本とトマトが1個ついているだけのものであった。チャパティをカレーじるにつけて右手だけを使って食べるのである。私は左手も同時に使ったものだから、皆ゆかいそうに笑っていた。この食事は学生が一食16パイサだと言っていた。16パイサとは日本では5円ということである。学生達も実につつましやかな生活をしているのである。

私の給料がそのころいくらだっただろうか。だいたい年額、300万円くらいだったと思う。それに妻の給料200万円を加えると、年額500万円か、それを下まわっても450万円はあったらと思う。院生達は私の給料を聞いた。私の答にびっくりした。それは大統領の2倍の給料だとか、クリアン博士の何倍の給料になるとか、わいわい言っていた。しかし私は皆に日本の物価事情を説明してやった。コーヒー1杯が日本では150円はするのだ、もし召使い(女中さん)をやとうと月7万円は必要なのだといったことを説明すると、皆ある程度納得はしていた。しかし、それなら自分は日本の召使いになるよとじょうだんをいう院生もいた。

院生のサリー氏がムラサキガイの類がトリバンドラムに行けば多く採集できると言って、私にトリバンドラム行をすすめた。私は彼に従ってトリバンドラムにつれて行ってもらうことにした。トリバンドラムはケララ州の主都である。朝早くバス乗場に行った。バスの前には、日本のバスと同じように行先が表示されている。しかし日本人が一人でバス旅行をするのは不可能に近い。表示はマラヤラム語で書かれており、なにが書いてあるのかさっぱりわからない。サリー氏に100ルピー渡しておき、いいようにとりはからってくれと言っておいた。バスは窓ガラスのない風通しのよいバスであった。雨は乾季だったのでほとんど降らないのだが、途中で夕立があった。雨がくると窓の上につけてあるホロを降ろす。そして雨をしのぐのであった。バスは7時間もかかってトリバンドラムに着いた。

サリーは1泊15ルピー程度の安ホテルにつれて行った。しかし、別段ひどいところでもなく、安心して泊れるホテルであった。宿をとったのち、サリーは私に1人の人物を紹介すると言って、トリバンドラムの街を散歩がてらに歩いて一軒の家に連れていった。その家は木のはすか

い格子のあるちょっと変わった家だった。ここでモハン・ダスという青年を私に紹介した。ダスは自分の部屋に案内するとともに父母を紹介した。私は日本式に礼をして自己紹介をした。ダスの後からの話によると、ダスの父親は私に非常によい印象を持ったとのことであった。それは私が非常に礼儀正しい人間だとうつつたということであった。ダスの父親は55才位の人で、自分の部屋には新聞をていねいに、うず高く積み上げていた。彼はこの新聞を参考として社会的問題について文章をとっているとのことであった。ダスの専門はアイソポダの類の分類であった。もっぱら大学ではその方面の研究をしていると言っていたが、私はインドのこのまづしい現実の前で、アイソポダの分類とはいかにものん気な話ではないかと思えたのであった。

ダスほど政治の話の好きな人間もいなかった。私に沖縄問題の意見を求め、ベトナム民族解放戦線の意見を求め、また日本の政党の支持について、ソビエトや中国の動きについての意見を求めた。そのころ、私はソ連や中国の社会主義について強い疑念をもちはじめていた。もし日本がそのような社会主義になるのならば、今の資本主義社会の方がよいと思ひさえしていた。ソビエトのは権主義的で言論の自由のない社会主義、文化大革命という文化破壊行動をおこなっている中国、ともに住みたい国ではなかった。私は、ソビエトも中国もいい国だとは思わない。しかしベトナム民族解放戦線は支援したいし、沖縄は本来日本の領土だから米軍基地があるのは望ましくない、と言っておいた。私が、ソビエトも中国もけなしたのに対し、ダスは大いに不満のようで、君の意見はあいまいだと言っていた。

夕食のためどこかで食事をとらねばならなかったが、私はサリーとダスに、この街の最高級のホテルへ連れて行けと言った。私のわずかな持ち金も、インドでは10倍の働きをする。私はそのため、少しづつこう慢になりかけていた。彼らは私をマスコットホテルに連れて行った。ちょうどクリスマスイブの日で、食堂では数組のヨーロッパ系の人達が静かに食事をとっていた。私どももテーブルにつき、ヨーロッパ系・スタイルの食事をとった。しかし、一流ホテルであるにもかかわらず、ここでの洋食はひどくまずかった。しかし料金は安いもので、50ルピーも支払わなかっただろう。マスコットホテルから私達の宿舎までの帰り道、私はひどい風景を目にすることになった。長さ2 m 高さ1 m ほどの屋根型のものがならんでいた。暗くてよくわからなかったが、ボール紙に黒いタールをぬりつけて作ってあるようであった。入口も出口もふさがれていないただの三角屋根のようなものである。その中で親子3人が暮らしていた。また別の小屋には夫婦2人で生活しているものもあり、とても人間の住み場所とは言えなかった。お腹をすかした幼児の泣き声が、どこかの小屋からもれて来ていた。泣き声でそれはお腹をすかした声であることが直感的にわかった。私は胸を突き刺されたような思いがした。私はこの貧困をどう解決してやるわけにもゆかない。ダスは社会主義を賛美するが、大学でアイソポダの研究をやりながら、私達とコーヒーを飲みながら話す社会主義である。そしてユーゴスラビアの社会主義はどう

だの、イタリア共産党の方向はどうだのといった理屈を奏しむサロン風社会主義である。だがこの貧困の現実をどうするのかと言うと、答はでないのである。

トリバンドラムの海岸はコアバラムビーチといって、すばらしく白い砂浜とヤシの森が続く海岸であった。日本ならば、さしずめ白砂青松というところだが、ここでは松の代りにヤシの林がそれにおきかわる。日本の黒松とインドのココナツツリーはどうも同じ生態的地位を占めているように見かけられた。海辺では昔日本で見られたと同じような地引網を引いていた。私達が通ると漁師達は手つだってくれと言っていたが、そのまま通りすごした。ここには少しばかりの岩礁地帯もあって、イガイの類がついている。しかしこも漁師の家族達が多く来て、イガイをとっていた。だからあまりいい標本は得られなかった。私達は女、子供達が採った貝を買った。2 Kg 程度の貝を　　ピーで売ってくれた。

コアバラムビーチにはヒッピーも多くいた。彼達は漁師の小塵を安く買いこんで生活していた。サリーはヒッピーのことを、彼等は動物と同じだと言っていた。ひどくヒッピーを軽べつしていた。しかし私はサリーに、彼等はアメリカの競争社会と文明にいや気がさして逃げだした者等なのだと言ってかばってやった。インドはヒッピーにとってのん気で暮らし易いに違いない。ここには競争もなければ、資本主義的な技術文明の発達もそれほどではない。しかも、アウトサイダーだからインド社会のあれこれといった制約の中に生きる必要はない。ほんの少しの金があれば、インドで何年間か生きていくには不自由はない。このインドでのアウトサイダーであるということが、実は外国人にとっては魅力なのである。私がインドに来たかったのも、実はこのところにあるのではなかろうか。私はいつも外国人として扱われ、インド社会のどの位置にも属するものではない。こここのところが外国人であるということの最高の魅力なのではあるまいか。

ダスとサリーがインドの南端ケーブコモリンに行こうとさそってくれた。タクシーはダスが知り合いの運転手を連れて来た。トリバンドラムからコモリン崎までは、ひどくたいくつな旅行であった。同じような風景の中をただひたすらにタクシーは走り続けた。昼前にトリバンドラムを出て、11時に着いたのは日もとっぷり暮れた8時ごろだった。私達は11時にある有名な寺院に入れてもらうことにした。ヒンドウ教の寺院であった。お寺に入るにはドウテイ姿にならねば入れなかった。また、皮製品を持ちこむことも禁止された。これは牛と関係があるからだ。カメラはケースが皮でできているのでだめであった。そうしたものを入口の受付にあつて、上半身はだかだかドウテイだけをまいてお寺に入ることになった。ドウテイというのは白いただ1枚の布で、それを腰にまきつけるだけのしごく簡単な服装である。ケララ州では、これさえつけていれば、他人に対し失礼になることはない。寺院の中は広大な石造りの回廊が続いていた。その石造りの構造は見事なものであった。回廊の行きついた最奥が祭壇になっていた。多くの人達がヤシの裏に花をそえたおそなえものを持っていた。僧がおいのりをしている間、私達は手のひらに

ものを受けるかたちをして、手を前にさしのばさなければならなかった。私は多少気味の悪さを感じたので、ダスに出ようと言った。ところがダスは、このままでいなければいけないと言うので、仕方なく皆がしているようにしていた。僧が私のひたいに赤いものをぬってくれた。寺院を出て多少そのあたりを見物し、タクシーでその日のうちにトリバンドラムに帰った。ひたいの赤い印は、トリバンドラムまでつけたままであった。タクシーの長旅でまったくつかれはててしまった。

コーチンの街で私は1人で歩くことはほとんどなかった。かならずサリーかジョセフがついてくれた。でなければ他の人のときもあった。しかし私もときには1人歩きをしてみた。すると全く違った世界がそこに展開されたのである。1人歩きをしていると1人の大学生が私に話しかけてきた。そして私を宿舎まで送ってやろうと言う。私は道を知っているからかまわなくてくれと言ったが、大学の宿舎まで自転車を押してついて来た。そして私の部屋に入り、日本に就職口がないか、また、インドに進出している日本インド合併企業に就職の紹介をしてくれないかなどとしつこく私にたのむのだった。私が日本へ帰ったあともこの学生は手紙をよこし、日本での就職口をたのんできた。日本は外国人の通常労働を認めていないということを説明しても、なかなかわかってくれなかった。1人歩きで知ったことはまだあった。人力車の車夫が私についてくる。私の父親ほどの年齢に見えた。そして、ユー テイク リキシャ、アイ アム アングリー と言うのである。私はおかしなことを言う男だと思った。この男、なにをおこっているのだろうかといふかった。しかしそれはアングリーではなくハングリーであることに気がついた。その男はそれだけ言い続けて、200メートルも私について来るのだった。「私は空腹だ、人力車に乗って金をくれ、私はそれで食事をする」という意味だったのである。私は人力車に乗る気はなかった。「1ルピーやるけれど私は乗らない、それでいいね」と言うと男はうなづいて1ルピーを受けとり、私からさって行った。また私はコーチンの街はずれに一人で行ってみた。ヤシの林の中に小さい小屋が点在していた。そんな道を散歩していると、夕食の支度に金属製のカメに水をくんで帰ってくる女性などがいた。そのうち私はとある小屋の前に出た。10才ばかりの女の子が2人いて、そのうちの1人が赤ん坊をだいていた。私はその赤ん坊の顔を見た。驚くべきことにしわだらけのおばあさんのような顔をしていた。手も足も木の枝のように細かった。これはすさまじい栄養失調なのである。私はひどいものを見てしまったという思いであった。私は2人の女の子を呼んだ。しかし彼女らは逃げていき、遠いところから私を見つめていた。私は小屋の前にあったイスの上に5ルピーを置き、「ミルク、ミルク」と言ってお金を指さした。その意味が女の子に通じたかどうかはわからない。しかし、私にはその場ではそうすることしか出来なかった。

私がはじめてインドへ旅立ったとき、私の英語の力はどの程度のものだっただろうか。だい

たい今から思うに、英単語の力は2000語程度のものであったのではないかと思う。これでも皆無よりはましなのだが、中学・高校・大学と進んでおいて、英単語が2000というのはひどくなさない話であった。大学を出てから英語の勉強といったことは少しもしていなかった。強いて言うなら、インドへ旅立つ前に、ムラサキイガイに関する論文を英語で1編だけ書いていた。このとき、英語でものを書く苦労をかなり味わったが、これがインド旅行のとき役立った。学校で英語の勉強はしたが、外国人とはほとんど話をしたことがなかった。だから最初の一週間ばかりは、なかなか口から英語が出てこなかった。しかし、一週間もすると大胆になり、たった2000の英単語だったが、これを適当に使って自分の言いたいことは言えるようになって来た。最初のインドの税関では電子計算器を持っていないかと聞かれ、それをイエスともノーとも答えられないような状態だった。ともかく英語が口をついて出ないのである。しかしともかくインドの友人たちが使っている英語をすぐ口まねして私も使った。学校で習った英語では、take とか get といった単語の意味はひとつだった。しかし、実際に使う段になってその単語が千変万化することを知り、その便利さを知ったものだった。私は旅行をする前に中学生用の辞書を1冊買いそれをポケットにいつも持っていた。しかし、この辞書は単語数が少なくて役に立たなかった。日本に帰った後、英和、和英の両辞典が1冊になっていて単語数もかなりあるものがあることを知り、以後の旅行にはそちらの方を持ってゆくようにした。

私はクリアン博士にたのんで、インド中央海洋漁業研究所を見学させてもらうことにした。私は名前からして大研究所を想像し、大型水槽やタンクが並んだ設備を想像した。しかし、ここにはそうしたものは全くなく、10室あまりの研究室とその部屋に3~4人のスタッフがいて書類が積まれてあるだけであった。彼等の主な研究はフィールドワークであったので、それはあたりまえのことであったのかも知れない。しかし、統計研究室を見学したときのことは最も記憶に残った。ここは、インド全土で漁獲される水産物についての統計を行っているところである。ぜひめ日本ならば大型コンピューターがいそがしく働いているところである。しかし、ここには電子計算器さえもなかった。あったのは手回しの2台の計算器だけであった。書類だけは山のように積み上げられていたが、よくも手回し計算器だけでほう大な資料分析ができるものだと思いと同時に気の毒に思った。

そうした設備の貧弱さはコーチン大学の海洋科学部でも同じであった。彼等はなにもしない中で研究しなればならない。しかし、研究と名がつけば、それはどんな研究でも国際的な研究業績の上につき上げられ位置づけられてゆくものである。こうした何もしないの中から研究しようと思ってみても国際的に位置づけられるものが出てこないのは当然である。発展途上の研究者がいかにか知恵をしぼろうと、先進諸国との間にますます大きな差がつくばかりであることを実感した。

大学教授のモラル

こんなことで良いのだろうか？

奥野良之助

私のいる金沢大学理学部に、数年前、「低レベル放射能研究施設」という付属研究所ができました。我々の環境にあるごく低いエネルギーの放射線を研究するところで、原爆実験や原子力発電所などによる放射能汚染が問題になってきたので、つくられたものです。そして、長らく低レベル放射線の研究をされ、日本における権威者の1人、阪上（さかのうえ）正信教授が所長に就任されました。私が金沢へ来たころ、まだこの研究施設はできてなかったのですが、阪上教授は私の本や論文を読まれ、積極的に賛成とまではいかずとも、反対はされず、公害問題にも理解の深い先生だと思っていました。

ところがこのほど、通産省資源エネルギー庁がスポンサーになった、明らかに原子力発電所推進のための意見広告に、大きな写真入りで登場され、先生の学識からは想像もできないようなことを言われているのを見て、びっくりするとともに裏切られた気持ちになりました。

この広告は、「低レベル放射線って、意外と身近な存在なのです」という大きな見出しが付き、NHKの「連想ゲーム」の女性軍キャプテン、中田喜子さんが阪上教授を訪れ、いろいろたずねるといふ形をとっています。新聞半ページに近い大きなもので、私が見たのは9月17日付朝日新聞ですが、毎日、読売といった全国紙、北国新聞のような地方紙にも、もれなく掲載されたようです。その影響は相当なものでしょう。私が「日本生物学会誌」にその反論を書いてみたところで、全会員が読んでくれたとしてもせいぜい250人、朝日の1000万読者には少しばかり及びませんが、千里の道も一歩からということもあります。当節、直接的な効果を期待しては、何をするのもいやになる時代ですから、そういうことは考えず、とりあえずこの広告を批判していくことにしましょう。広告は、5つの部分に分れています。それにしたがって、1つづつとりあげます。

環境のなかの放射能をさぐる

はじめは、「低レベル放射能研究施設」とそこでの阪上教授の研究内容の紹介。

「ひと言でいえば、銀河系の星や太陽から地球に降りそそいでいる宇宙線、自然の中にもともとある放射性物質、それに人工放射性物質など、私たちの身のまわりにあるいろいろな放射線と放射能について研究しています。」

ここは、阪上教授がいかにその道の専門家であり大家であるかを印象づける導入部です。

放射能と放射線は違うものですか

中田 ところで、放射能と放射線は違うものですか。

阪上 身近なものに例えをと、電球が「放射性物質」に当たり、光を出す作用が「放射能」、光そのものが「放射線」ということになります。放射性物質が放射線を出す働きを放射能といいます。しかし、近ごろ日本では放射性物質そのものも放射能といわれることがありますね。

さすがはその道の大家、放射性物質と放射線と放射能とがどのように違うかの説明は、実に明快です。このこと自体は単なる科学的説明であって、うん、そうか、と聞いておくしかありません。ただし、ここでことさらこれらの区別を試みさせたのは、実は非常に政治的な含みがあるのです。放射“能”を放射“線”から区別しておき、人工放射能でも自然放射能でも、それが出す放射線自体は同じだから、“人工”だからといって特別視することはない、ともっていこうとするのです。そうしておいて、次のようにその「怖さ」をうち消します。

中田 放射能ってコワイものなんでしょう。

阪上 むずかしい質問ですね。怖くもないし、怖くもある。ちょうど水や空気と同じで、量がある限度を越えた場合が問題です。つまり大洪水や暴風となって、人間にとって危険なものになる。それと同じです。

これは少々、科学者阪上教授としては乱暴すぎる論理ではないでしょうか。「少量の水は怖くはないが、大量の水は怖い。」地球の上で、これ以上はないという大量の水が集まっているところは、いうまでもなく海です。この論理でいけば、海は見ただけでも石と化さねばならぬほど怖いはずですが、夏になるとその怖い場所へ、高い金を払ってまで、たくさんの人がおしかける

のは、どういうわけでしょうか。太陽が照り、水が蒸発し、雨となって山に降り、そこではじめて洪水がおこります。洪水は単なる水の“量”ではなく、太陽エネルギーが水の位置エネルギーに変わり、それが一気に放出されることによっておこるのです。阪上流の論理でいくと、太陽こそ怖さの元凶になりそうです。水は、いくら「限度を超えた量」があっても、他のエネルギーが加えられてそれを動かさぬ限り、人間にとって有用なだけで決して害はおよぼしません。

もっとも、本当の水の「怖さ」は、別のところにあります。それは、阪上教授の意見とは正反対で、水は少なすぎる方が怖いのです。もし1年間、日本に雨が一滴も降らなかつたら、その被害は洪水の比ではないでしょう。これは、水が人間にとって本来安全な「もの」であり、本来必要な「もの」であることを示す事実です。

放射性物質の方はどうでしょうか。これがたくさんあると怖いことは、広島・長崎で証明済みです。少しでも、原子力発電所の労働者や放射線を扱う病院の技師たちが、その怖さを証明しました。原子力発電所で大量にできるプルトニウムにいたっては、耳かき1杯(1g)で何と100万人の人を殺せるだけの毒性があるといわれています。私はそんな恐いものをさわったことはありませんが、その道の専門家阪上教授は、当然扱っておられるでしょう。水や空気と同じ程度の取り扱いをなさっておられるのかどうか、是非おうかがいしたいところです。放射性物質が水や空気と違うのは、他からエネルギーを与えなくとも、そのもの自身がエネルギー、すなわち放射線を出し、それが我々生物にとっては致命的にもなりうる障害(ガンや遺伝的突然変異)をひきおこす力を持っているからです。一方、かりに自然に存在する放射能が全くなってしまうとしても、私たちは何も困ることはありません。むしろそれによっておこっているはずのガンや遺伝的障害がなくなって、もっと結構なことになります。進化は自然放射能による突然変異によって起こったのだ、それがなくなればこれ以上人間は進化しなくなる、という、少々うがちすぎた意見もありますが、人間が突然変異して“超人”などが生まれると、ますます世界は混乱しそうですから、もう進化は止まった方がよいと思われまます。超人は、我々凡人をだまし、またヒットラーのようなことをやるかも知れませんから。

そのもの自体が人間や生物に悪い影響を及ぼす強力なエネルギーを持ち、なくなっても一向に困らない放射能と、他からエネルギーが集中的な形で加わらなければ何の害をせず、しかも私たちにとって生存上必須の水や空気とを、全く同じものと見て、量の大小だけを問題にする。こういうことは、ふつうの常識人にはできません。すべての質的相異を無視し、すべてを量的にだけ比較する、これは近代的な自然科学者の特質の1つなのです。

ただし、ここでは阪上教授の近代科学者ぶりに感心しているわけにはいきません。放射能を水や空気と同質にしてしまったのは、だから微量だったら安全だと、電力会社のチョウチン持ちをするためなのですから。

身のまわりには放射能がいっぱい

中田　じゃあ、少しなら大丈夫……？

阪上　そう。私たちが毎日口にしている食べ物や水はもちろん、お茶やコーヒー、それにタバコなどにも自然の放射能が含まれています。

そして阪上教授はたくさんの具体例をあげて、人類がいかに多くの“自然”放射能の下にくらしているかを説明していきます。「人間の体」「家の壁、特にコンクリートの建物」「空気」「地面」「トンネルの中」「飛行機（宇宙線がふえる）」要するに、「私たちのまわりで放射線の出ていないものはない」といいほどです。

なにしろ「低レベル研究所」の所長が言われることです。きっと本当なのでしょう。私たち素人はそこでびっくりして、「ほんまに大丈夫なのかな？」と思います。ところが阪上教授は、こともなげにこう言明されます。

はるか大昔から人類はこんな自然環境の中で誕生し生きてきたのですから、気にしてもしかたありません。

阪上教授は、学者らしく用心して、「大丈夫」とは言わず、「気にしてもしかたがない」と言われます。それは、「大丈夫」でないことを知っておられるからです。大昔からある自然放射能のために、これまで多くの人たちがガンにかかり、遺伝的障害を起こして奇形児が生まれたりしているのです。にもかかわらず、人類や生物が今日まで生きのびてきたのは、その発生率が非常に低かったためにすぎません。生物や人類の持つ強大な再生産能力がその損失をおぎなってきたわけです。たしかに、「人類全体」から見れば、とるに足りぬことかも知れません。しかし、ガンになった人、遺伝的障害を起こした人にとってみれば、そうは言ってもらえません。とても「気にしてもしかたがない」ですまされない問題です。もちろん、自然放射能を全部とり除くことは望むべくもないことですから、私たちが自分の生き方として、「気にしない。空から星が落ちてきて当ることだってあるのだから」と考えることはできます。

しかし、国民の税金をたくさん使い、研究所まで建ててもらった阪上教授としては、その自然放射能が人類にどの程度の被害を与えているのかを具体的に明らかにし、これ以上被害を大きくしないよう、警告を発するのが義務ではないでしょうか。そうではなしに、人類は大昔から自然放射能の下で大過なく暮してきたのだから「気にしない」と、自然放射能とともにそれによる被害者を切って捨てたのでは、私たち国民はいったい何のために「低レベル研究所」など建てて

高額の研究費を毎年支払っているのか、わからなくなります。

次に教授は「人工」放射能にふれます。

しかし、現代人はこれら自然放射線以外に、人工放射線とよばれる放射線を受けています。よく知られているレントゲン撮影の他に、テレビなどからも放射線を受けています。

これでおしまいです。自然放射能については「気にしない」と言い切られた教授は、人工放射能については、それをどう考えたらいいのか、一切言われません。私たちがさまざまな人工放射線を、しかも相当多量に浴びているのは事実です。ただ、「気にせずともよい」「大丈夫だ」と言い切れる学者は、おそらくいないでしょう。だから、テレビはなるべく離れて見よう、とか、むやみにレントゲン撮影はするなとか、言われるようになったのです。研究に使うラジオアイソトープ（放射性同位元素）の取り扱いも、初めは随分いいかげんで、白血球が減少した研究者が続出したりしました。いまでは取り扱い規定が厳重に定められ、それ専用の研究室に資格を持った人がいなければ使えないことになっています。このように、人工放射能は明らかに多くの障害をひきおこしています。阪上教授がそれを知らぬはずはありません。だから「気にするな」とは言えなかったのです。そして、全くそれにはふれないという方法をとりました。もっとはっきり言えば、ウソはついていないけれど「隠した」のです。なぜ「隠した」のでしょうか。それは次の節を見るとわかります。

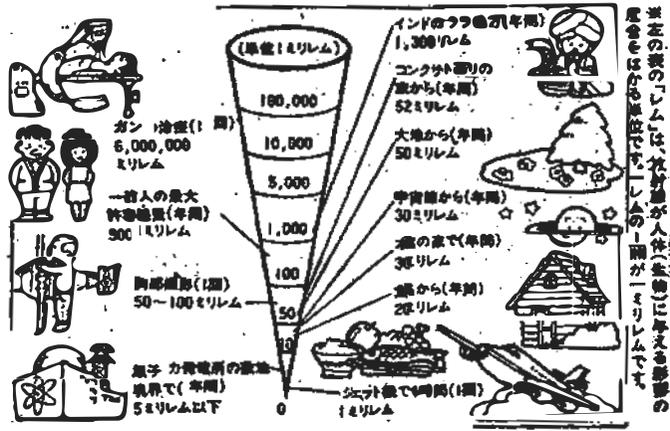
人 工 放 射 線 と 自 然 放 射 線 は 同 じ

全文引用しておきましょう。

中田 人工放射線と自然放射線とは別のものなのですか。いつも話題になるのは原子力発電所からの放射線のようなのですが。

阪上 変わりませんね。人工とか自然とかが問題なのではなく、要は放射線の“量”が問題なのです。確かに原子炉の中には慎重な取り扱いが要求される比較的レベルの高い放射性物質が残りますが、それは一般の人から隔離された状態で、安全に処理・処分するため努力がなされています。

原子力発電所から出る放射線は厳しく管理されており、平常時の数値はごく低く、よく見かける右の表<次ページ>をご覧くださいになればおわかりいただけるでしょう。原子力発電所の敷地境界での線量目標値は一年間の五ミリレムとなっていますが、この値は



胸部レントゲン撮影一回分のおよそ1/20です。しかも、実績値はこの線量目標値をはるかに下回っています。

いくつも問題のあるところです。順を追って批判していきましょう。

まず初めは、人工放射線と自然放射線は同じか、という質問を出させ、同じだと答えている点です。この限りではまちがいはありません。しかし、もし中田喜子さんが、人工放射性物質と自然放射性物質は同じか、と質問すれば、阪上教授は答に困ったことでしょう。それは決して同じではなく、そこに原子力発電の恐しさの1つが存在しているからです。ここで、前に放射性物質、放射能、放射線を科学的に区別しておいたことが生きてくるのです。

大昔から生きてきた生物や人間は、自然放射性物質、たとえばラジウムやウランウムなどは体内にとりこまないようにしてきました。というよりも、もしそんなものを取りこみ、体をつくる材料のひとつにした生物がいたとしても、すべて放射線の内部被ばくを受けて死滅してしまい現在まで残ってこなかったのです。それが出す放射線がたとえ低レベルのものであっても、体の中で局所的に、四六時中浴び続けてはたまりません。外部から来る放射線であれば逃げることもできますが、体の中に持っていては逃げようがないわけです。その上、放射線の強さは発生源からの距離の2乗に反比例して減っていきます。逆にいうと、距離が1/2になると4倍、1/10になると100倍、1/100になると、実に1万倍の強さになるということです。体内被ばくというものが、体外被ばくに比べていかに恐ろしいかがわかるでしょう。

人間がつくり出した人工放射性物質は、いままで自然にはなかったもので、だから生物は知

実といっても言いすぎではないでしょう。100万キロワットの原子炉の中では、広島型原子爆弾1発分が8時間で燃えます。1日3発分、1年で何と1000発分。それだけ分の死の灰がたまるわけです。その上、原爆では出来なかったプルトニウムも、原発では出来ます。これは、核分裂をおこさないで原爆には入れてないウラニウム238を、原発では入れてあるので、これがプルトニウムになってしまうのです。例の耳かき1杯で100万人を殺せるという物質で、これが1年間に、300キログラム出来ます。これを、何も動かさず、そっと密封しておくくらいなら、まだもれないかも知れません。でも、原子炉の中は圧力150気圧（1500メートルの深海の水圧と同じです）、そして350度のお湯が秒速5メートルくらいのスピードで流れています。流すためにはポンプが必要で、ポンプには軸受けがあって、水がもるのはさげられません。そして、最高の材料と最高の技術を手ぬきせずに使ったとしても、いつかは老化し、密封などできたものではないでしょう。おまけに、敦賀原発が見事に証明してくれたように、人間の手ぬき加わります。これも、利潤をあけることが至上命令である資本主義社会では、不可避なことと言えるでしょう。さいごに、スリーマイル島のような大事故が起こる可能性があります。かつては炉心の損傷までいく事故などほとんど起こらないとされていたのですが、最近のデータでは案外よく起こりそうだということになってきました。たとえば、アメリカの70基の原発で、20年から60年に1回くらい起こるとされています。このことは、また後でふれます。

何とか使い切ったのこり、つまり使用済み核燃料の処理・処分が、また簡単にはいきません。何しろ大量のプルトニウムなのですから。これを再処理してまた燃料に使うというのが、いわゆる増殖炉ですが、再処理過程とともにあまりにも危険が多すぎます。ウランを使う現在の原発ですら危ないのですから。同時に出る低レベル廃棄物の処理も、南太平洋へ沈めようとして、ミクロネシアの住民にしかられました。私がかつて「国立公害研究所」をたずねた時（本誌第8号参照）、向うの中位にえらい人に、これからの最大の公害は原子力発電だと思うが、「国立」公害研究所として何か調査しているのか、とたずねたところ、その中位にえらい人は、調査するまでもなく、原発は廃棄物の処理でいきづまるにちがいない、と答えました。「それやったら、国立公害研究所の名前でそう言わんとあかんやんけ」と言ってきたのですが、残念ながらまだ公式声明は出ていないようです。

阪上教授はおそらく、「そういう問題がすべて解決した、とは私は言ってない」と言われることでしょう。確かに先生は、「処理・処分するため努力がなされています」としか言われていません。私も時々使いますが、これが学者のずるい手なのです。きちんと、正確に読めば、努力中なのですからまだ「安全」ではないのです。すでに安全のなら努力はいらないからです。現在ほどの程度安全もしくは危険なのか、いつごろになれば絶対安全になるのか、あるいは努力を続けたら本当に安全になる可能性があるのか。こういった私たちの疑問にこそ、専門家阪上教授は答えるべきだと思うのですが。

こうして、尻尾をつかまれぬ用心をしつつ、いかにも現在すでに安全であるかのように思わせておいて、すぐ、「原発の放射線はレントゲン撮影のたった1/20」と、それが全くとるに足りぬ微量であるかの如く続けます。「原発を怖い怖いと言うが、だれも怖がらず受けているレントゲンの方がよっぽとすごいですよ」というわけです。電力会社がよく言うセリフです。

でも、ここにも隠された問題があるのです。私は10年ほど前、胃カイヨウに悩まされました。度々透視を受けて、それこそ原発数十個分の放射線を浴びました。ただしそれは、私自身が決めたことです。放射線を浴びるとガンになる可能性はあるが、それよりも当面胃カイヨウを治さなければ死んでしまう。だから透視を受けました。手術してからは一度も透視は受けていません。これも自分で決めたことです。原子力発電所からもれる放射線は少ないかも知れません。でもそれは、自然放射能に上積みされて、人間にとって悪いことばかりでも良いことばかりでもない。電気を増やさないで済ませていく生活を営むためには、分々の危険はかまらざる、という立場をたしかに取るべきでしょう。そういう人は大都会ほど多く、しかもそういう人も、自分の家の近くには原発をつくらせてほしくないと思える人が多いそうです。何のことはない、受益は自分に、被害は他人に、という明らかなエゴイズムです。原発は放射線をこれ以上浴びたくないと思っている人にも無理に浴びせてしまいます。レントゲン撮影の場合のように、本人の意志のはいる余地がないのです。

放射線の人体への影響

最後の節で阪上教授は、やはり巧みに言葉を使いながら、低レベル放射線は大して人体に影響しないことを説いていきます。引用を続けましょう。

中田　ところで、放射線を浴びるとガンになるとか聞きますが、どうなのですか。

阪上　それはちょっと極端な例で、多量の放射線を浴びた場合、その可能性が出てくるということです。高レベルの放射線が生物にどう作用するかの研究はかなり進んでいて、動物実験等ではガン発生率が高いという結果が確かに得られてはいます。しかし、私たちがここで研究をつづけているのは低レベル放射線なのです。この低レベルの分野はまだまだ研究・実験の余地がありますね。地道に研究はつづけられていますが、一朝一夕に究明はできません。

ちょっとしぶしぶといった感じですが、阪上教授は高レベル放射線によるガン発生は認めます。これは認めないわけにはいかないでしょう。広島・長崎・多くの核実験において、たくさんの人々が身をもって証明し、さらに証明しつつある事実なので、教授の専門領域である低

レベル放射線の場合は、教授によると、ガンの発生が増えるかどうか、まだ研究不足でわからない、ということのようです。本当はやはり増えるのですが、もし教授の言うとおりでしても、そこから出てくる結論は、「だから皆さん、たとえ低レベルといってもなるべく放射線には当たらないようにしましょう。研究が進めば有害だという結果が出るかも知れないのですから」となるはずです。ところが、阪上教授は次のように、その結論をうすめてしまいます。

けれども、世界的には放射線量が十数倍も異なる地域が現存するにもかかわらず、これらの地域間で放射線による疫学的な差異は今のところ見受けられませんので、学問的には低レベル放射線の影響はあるかもしれないとされているにしても、実際的には問題にならぬほど軽微であると考えられます。

お産の前に、正常な分べんができるかどうか、骨盤の大きさを計るためのレントゲン撮影はやったことがあります。1958年にイギリスのアリス・ステュアートという女医が、この検査を受けた母親から生まれた子供は、幼児性白血病になる率が高いという結果を発表しました。いろいろと反論が出たりしたのですが、1962年に、アメリカのマクマコンが実に70万組の母子を調査して、その影響を確定しました。妊娠中に1回でもそのレントゲン検査を受けた人の子供は明らかに、1回も受けなかった人の子供よりも発病率が高かったのです。2回受けた人は1回の人2倍、3回受けると3倍に増えるということもわかりました。(市川定夫氏の講演から)

こういう例があるので(他にもいろいろありますが)、阪上教授は「学問的には影響はあるかもしれないとされているにしても」と非常に苦しい言いまわしをされたあけく、「実際的には問題にならぬほど軽微だ」と、とうとう「学問」を捨てて「実際」についてしまいました。「学者」が学問を捨てては困ります。もっとも、学者というものは、学問の中に閉じこもっているからこそ、いいかげんなことを言っても命脈を保てるのであって、実際の場にはいけば、そうは簡単にいきません。

「問題にならぬほど軽微」というのはどういうことでしょうか？ 今、日本全国で交通事故の死者数はほぼ1万人で、大変問題になっています。これが千人、あるいは百人に減ったとすれば、「問題にならぬほど軽微」となるのでしょうか。国全体から見れば確かにそうかも知れません。しかし、たとえ千人でも百人でも、あるいは1人でも、その当人にとってみれば全てを否定されたことになるのです。低レベル放射線によって毎年1万人の人がガンにかかる、これは「問題になる程度」であり、千人であれば「問題にならぬほど軽微」である。あれほど数量的表現の好きな近代科学者阪上教授なら、せめてこういう数字をあけて論じてもらわなければ困ります。あとでもふれるつもりですが、年間の放射線許容量500ミリレムによって、日本で1万人ガンが増えるというデータもあります。原発境界地の目標値5ミリレムでも、100人くらいは

ガン患者が増えるという推定値もあります。いったい阪上教授は、何人ぐらいいまでなら「問題にしない」のでしょうか。「学問上」の話ならこれでもかまわないのですが、「實際上」になるとこれでは通りません。「軽微」でも、何人もの人が死ぬのですから。

中田　でもやはり、この量なら安全！という答みたいなのがないと不安は残りますね。

さすがは「連想ゲームのキャプテン」、いいところをつきます。1人もガンにかからない「安全量」をたずねます。ところがそれに対する阪上教授の答は、不真面目極まるものです。

阪上　いや、その点に関しては、世界中の放射線関係の学者が集まって、人類が放射線によって害を受けないように検討している委員会（国際放射線防護委員会 ICRP）の勧告が以前に出されていて、一般の人についてこれならまず人体に影響がない。身体的にも遺伝的にも障害がとくにない線量を年間500ミリレムとしています。現在は日本でもこの勧告に沿って、一般の人が一年間に受ける放射線の許容値は500ミリレムと定められています。

先ほども申しましたが、日本の原子力発電所はさらに厳しく、原子力委員会の指針に沿ってその1/100の5ミリレムを敷地境界での線量目標値として運転されています。

中田喜子さんが聞いたのは「安全量」でした。つまり、これ以下ならガンは発生しない、という量です。ところが、阪上教授が答えているのは「許容量」です。両者は全く違う概念です。「被害はおきるのだけれど、まあこれくらいなら、それによって得られる利益と比べて、我慢しようではないか」というのが許容量なのです。だから阪上教授は、「これならまず人体に影響がない」「障害がとくにない」と、極めて微妙な言いまわしをされます。「これ以下なら絶対安全だ」とは絶対に言われたいのです。そしてその許容量すら、自身の研究、あるいは他人の研究でもいいのですが、研究で得られたいかなる根拠にもとづくものかについても、口をつぐみます。そして出してくるのは、「世界中の学者が集まった」「国際放射線防護委員会」の“勧告”という“権威”です。これも学者のよく使う手で、自信のない時やごまかす時に好んで用います。いかにも権威あり気ですが、世界中の“阪上教授”が集まっただけのことであり、「500ミリレム以下だったら絶対に障害は出ない」と言い切れるだけのデータを持った人が1人もいなければ、何百人集めたところで同じことなのです。

さて、この権威ある委員会が、一般人の許容量年間500ミリレム以下と決めたのは1958年のことでした。その4年前は、1500ミリレムと“決め”ています。放射線を扱う職業人

の年間許容量は別になっていて、1958年5レム（1レム＝1000ミリレム）、1954年15レム、1948年25レム、1936年50レム、1931年73レムと決められていました。いずれも、その当時の世界の最高権威が集まって決めたものです。学問が進むにつれてより詳しくわかるようになり、次第に許容基準がきびしくなってきたのは良い事だ、と自画自賛するのも結構ですが、わずかな年数のうちに余りにも突りすぎるとい見方もできます。これでは世界の権威もあまり信用がおけないようです。もっと研究が進めば、当然もっと切り下げなくてはならなくなるはずですから。1931年といえば今から50年前、私の生まれた年です。そのとき、「世界の権威」を信じて、年間73レム（＝73000ミリレム）の被ばくを安心して受けた人は、今ごろどうしているでしょうか。夢々権威などは信用しないことです。

1975年に、原子力発電所の安全性について、多くのデータを分析した上で出された「ラスムッセン報告」なる文書があります。これは大突「権威」あるもので、推進派は常にこれを援用してきました。この報告の中に、スリーマイル島で起こったような、炉心が溶融するような大事故（当然放射性物質が大量に出てきます）につながるような事故が起こる可能性は、2万炉年（1つの原子炉当りの年数。2つ原子炉があれば1万年となる）に1回くらいしか起こらない、と書かれています。ところが最近、アメリカの「原子力規制委員会 NRC」は、この報告に使われたデータを再検討するとともに、新しく1969年から1979年までの11年間にわたる事故記録を調べました。その結果、この間にアメリカで起こった「炉心の損傷につながる恐れのある事故」は実に169件にも達し、1700～4500炉年に1回おこると訂正されました。アメリカには70基の原発があり、何と20～60年に1回の割合で、炉心のとける事故が発生する恐れがあるわけです。（この9年21日付、朝日新聞による。）ラスムッセン報告の「権威」も、わずか10年足らずでこのとおり1/10に切り下げられてしまいました。

もう1つ、阪上教授が隠している事実があります。許容量には実は2つあるのです。教授はしきりに、「一般の人について」とか「一般の人が」とか言われます。年間500ミリレムというのは「一般の人」用の許容量であって、放射線を扱う職業人、つまり原発労働者に対しては、別の許容量が決められています。それは、3ヶ月に3000ミリレム、年間5000ミリレムという数字です。原発労働者がとくに放射線に強いというわけではなし、それによって金をかせぐ人は少し多めの放射線も我慢してもらおうという理由からです。本当は、年間500ミリレムにおさえられたら仕事にならないからです。実際には年間5000ミリレムでもたちまち限界に達し、そこで次ぎ次ぎと新しい人を投入していきます。だから原発で働く人の多くは下請けの労働者なのです。阪上教授は「日本の原子力発電所はさらに厳しく……その1/100の5ミリレムを数地境界での目標値にし」しかも実際には「それをはるかに下回っている」と誇らし気に書かれています。ところが、「数地境界」を一步はいると、そこは3ヶ月に3000ミリレムという

「許容量」が支配する領域なのです。もっとも、そこでも1/100におさえられているかも知れません。実際はどうなのでしょう。

ここに、9月11日付朝日新聞の、「原発従業員の被ばく線量 —— いぜん高い「下請け」」という記事があります。これは、この「広告」のスポンサー、通産省資源エネルギー庁がまとめた資料の報告であり、その中の数字は低くした可能性はあっても高くしたことはないはずで、下に引用しておきます。なお、1レムは1000ミリレムです。

通産省資源エネルギー庁は9日、56年度の原子力発電所の従業員らの被ばくと、放射性廃棄物管理状況をまとめた。それによると、原子炉に関係する作業従事者（4万532人）の年間平均被ばく線量は、電力会社社員0.19レム、下請け作業員0.33レム。いずれも許容量（3か月3レム）を下回ったが、下請け作業員が社員をはるかに上回って被ばくするというここ4、5年の傾向に依然、変化はなかった。

年間被ばく線量を発電所別にみると、東京電力福島第一（1～6号機）が平均0.63レムと飛び抜けて高く、次いで関西電力大飯（0.35レム）、同高浜、原電敦賀（0.32レム）の順。とくに福島第一が高いのは1号機の弁取り換えなど格納容器内の作業が多かったため、という。

個人被ばくでは昨年10月から11月にかけて、原電東海で燃料収納箱の修理作業をしていた下請け作業員が許容線量（皮膚の場合は3か月で8レム）の2倍以上の18.67レムの皮膚被ばくをしたのが最高。ほかには許容線量を越える被ばくはなかったが、福島第一で23人、九州電力玄海で1人の下請け作業員が年間3レムを越えていた。

許容量なるものが、いかなる“根拠”で決められているか、これでおわかりでしょう。放射線による被害（ガンや遺伝的障害）に安全な量はないといわれています。高レベルなら高率に発生し、低レベルなら低率に発生するのです。“一般の人”の“許容量”500ミリレムでのガン発生率は1万分の1（1億人で1万人）、遺伝的障害は5千分の1（同2万人）という資料があります。発生率は放射線の強さに比例しますから、5ミリレムでも1億人中100人（ガン）、200人（遺伝的障害）に発生する可能性があるのです。被害を0にするには放射線を0にする以外に道はありません。自然放射能があるから少くらい人工放射能を加えてもかまわない、のではなく、これ以上被害を大きくしないために人工放射能は絶対に加えてはならないのです。

それにしても、原子力発電所というものは、田舎につくって田舎の人を差別し、一般の人と原発従業員を許容量で差別し、従業員の中で社員と下請け作業員を差別する、まさに徹底した差別体系なのです。

阪上教授は、次の言葉でこの「広告」をしめくります。

原子力の利用が爆弾から開発されたということは確かに不幸なことです。でも、平和利用でありさえすれば、原子力発電のようにエネルギー問題解決への大きな糸口となり、ひいては人類の文化発展のためのかけがえのない存在にもなります。ですから、これからも科学として原子力を研究し、安全性向上に努力しつつ、私たちの暮らしに役立てていくことが大切です。

原爆はいけない（当然ですが）が平和利用＝原子力発電は良い。果してそうでしょうか。100万キロワットの原発では、すでにふれたように、広島型原爆1000個分を1年で燃やします。速く燃やすかゆっくり燃やすかだけの違いで、原理は全く同一です。死の灰に加えて猛毒のプルトニウムが300キログラムも出ます。これらの放射性廃棄物の中には寿命が数万年におよぶものがあり、その間放射線を出しつづけます。短期間に人を害するか、長期間にわたってじわじわと人を害し続けるか、原爆と原発のちがいはそれだけです。阪上教授は、平和利用の原発は安全だと言いながら、東京や大阪につくろうとは提案されません。それは、阪上教授自身、危険だと思っておられるからにちがいがありません。田舎なら、人口密度が低いから、「被害は問題にならぬくらい軽微」である。これは典型的な差別思想です。

現在日本では、電気は余り気味のようなのです。8月、高校野球がはじまって、多くの家庭でクーラーとテレビを同時につけると、足りなくなるそうですが、ただそれだけのために、田舎の人を危険にまきこみ、原発労働者に大量の被ばくをさせてもよいものでしょうか。発展させるべき「文化」というのは、クーラーとテレビではなく、もっと高尚なものだと私は思うのですが。

研究には金がかかります。たくさん金を出してくれるところは、文部省、通産省、あるいは大企業です。金をもらえばチョウチンの1つも持たねばならぬことは、資本主義社会の宿命かも知れません。でも、事実と真理に忠実であるというのが、学者の最低のモラルなのではないでしょうか。阪上教授が、自分の研究の資料をすべて出し、自己の信念として、「原発は安全である」と主張されたのなら、私はその意見を謙虚に聞きたいと思います。しかし、都合の悪い資料はすべて隠し、それでも無理なら「まだ究明できていないが問題にならぬほど軽微である」といった論理の飛躍をしたり、「安全性」を聞かれて「許容量」^にすりかえることなどは、この最低のモラルさえ破られていると、私は思います。

私は生態学を専攻し、放射能については素人です。いくつもまちがっているところがあると思います。指適していただければ、いつでも訂正します。

阪上教授の「反論」を期待します。

< 書 評 >

伊 沢 純 正 著 「ニホンサルの生態 —— 豪雪の白山に野生を問う —— 」

どうぶつ社 1982年、1800円

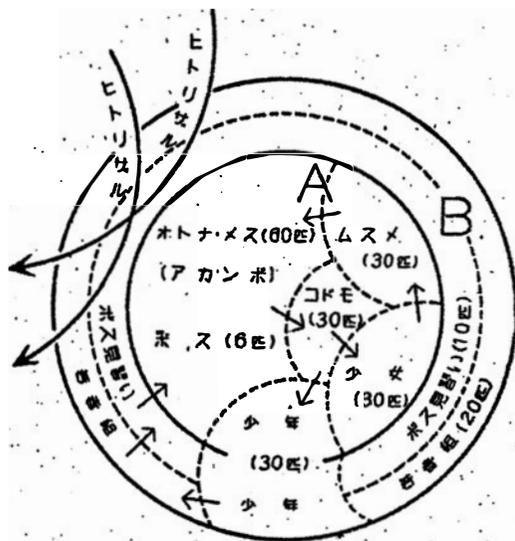
高名なる今西鯨司博士が、有名なる伊谷純一郎博士（当時は院生）をしたがえて、九州は都伊山へ半野生馬の調査におもむいたのは、敗戦の混乱まださめやらぬ昭和20年代前半のことであった。馬の群れを観察していた伊谷氏の目に、ある日ふと、鷹ならぬ狼の一群がとまった。伊谷氏とニホンサルとの運命的な出会いであり、ここから日本が世界に誇る霊長類学、すなわちサル学が発芽する。

伊谷氏は、いく人かの仲間と語らって、大分県の高嶺山に住むニホンサルの一群を研究しはじめる。後にジュピターと名づけられたこの群れのボスサルは、ひきしまった体、假い目、頼りな顔を持った、気性の激しいサルで、後々までボスサルの典型と見なされた。ちょうど学生になり立てだった私など、これこそ新しい生態学の研究だと思い、大きな影響を受けたものである。30年経った今でもそう思っているものだから、時々近代的生態学者におこられる。伊谷氏はその研究を本にまとめる。「日本動物記」第2巻「高嶺山のサル」（光文社、昭和29年；この本は後に「講談社学術文庫」の1冊として再版されているので、手に入りやすくなった。新たに書き加えられた「あとがき」が滅法面白く、一読の価値はある。）がそれである。サルの本はその後たくさん出ている。それぞれ興味深いが、面白さという点ではこの本の右に出るものはない。それは、まだ顔付けされず、山の中を神出鬼没、いや獵出獵没するサルの群れを、双眼鏡と野帳と鉛筆と、あとは自前の2本の足だけをたよりに、追いかけてまわした記録だからである。

この本の後半は、しかし、顔付けされたこの群れの社会構造を、個体識別した精密な資料をもとに分析したものであり、それはそれで面白いが、前半にくらべるとやはり迫力に欠けている。しかしながら、その後のサル学発展の基礎となったのは、実はこの後半の部分であった。ニホンサル社会論の原典と言ってもよいだろう。ニホンサル社会には、ボス（リーダー）がいて、群れを統率し、メスを独占する。ボスのいる群れの中心部に入れるのは、メスと子供だけであり、オスは若者になるとすべて群れの周辺部に追いやられ、そこで「見張り」の役をおおせつかる。もっと成長したオスは、たえず中心部へはいろいろとすきをうかがっているが、見つければたちまちボスに追いはられる。少しは中心部に入出入りを許されるようになったオスもいて、ボス見習い（サブリーダー）とよばれる。次のボスの候補者というわけである。群れの、ボスが老令化し統率力が低下すれば、いつかはこれらのサルがボスに出世するのであろう。

伊谷氏がこの本で描いたニホンサルの社会構造は、同じ本に載せられている次の図（サル社会の同心円構造）とともに、中学・高校の教科書にのほど一般化していった。大げさにいえば日本人の常識にまでなった。またこの研究は世界的にも認められ、一時日本のサル学は世界をリードした。今西博士は、サル学者の群れの“ボス”として君臨したのである。

このサル学の成果なるものは、心なき、たくらみある、人たちによって利用されたこともある。サルにもボスがいて威張っている。サルの子孫である人間に、えらい人とあかん人がいるのは当然ではないか。つまり、人間社会の階級性の原点をサルにまでもって行って、合理化しよう



第四九図 群れの社会構造 (1953年5月現在の高崎山の群れにおけるもの。A—群れの中心部、B—群れの周縁部。)

というわけである。こういう単純な議論しかできない相手に、現象的な類似性と本質的な類似性、すなわち、相似と相同の区別といった高尚な反論を加えてもわかるはずはない。そこで、「ヒラサルがボスサルをなぐりたおしたら、ボスサルになれまっしゃろ。平社員が社長をなぐりたおしたらどうなります？ 社長になるところか、クビになるだけやないですか」などという反論を言ったり書いたりして、私はその訂正に苦労してきた。

ところが、そういう苦勞もしなくてすむようになりそうである。この本の著者伊沢氏が、豪雪の白山を14年間も走りまわって、顔づけされていない野生のサルの群れをいくつも調べた結果、サルの群れには、ボスもおらず、見張りサルもおらず、1列に並んだ順位制すらない、ということ明らかにしてくれたからである。サルになく、人間にあるのなら、これはやはり、人間の発明にちがいない。

伊沢氏の見たところでは、群れの周辺にいつもたむろし、外敵の見張りを常に油断なく行なっているはずのワカモノサルが、しばしば群れの中心部（そこにボスやメスや子供がいる）から1キロメートルもはなれたところで、昼寝を決めこんでいたりするらしい。これでは見張りにも何にもなりはしない。それでは、外敵、たとえば野良犬や人間が近づいたとき、サルの群れはどうやって危険を知るのだろうか。「見張りサル」であろうが、コドモサルであろうが、はたまた「ボスサル」でも、最初に見つけたサルがすっとんで逃げるだけらしい。すると、全群のサルが前後の見さかさもなく、そのサルについて逃げ出す。ボスサルも何もあったものではないらしい。

そして、ともかく野良犬が追って来れない木の上に緊急避難するのである。見張りサルがボスに知らせ、ボスが全群に避難命令を発するよりは、この方が確実に速そうである。

もっとも、これだけでは野犬が木の下に居続ける限り身動きがとれない。そこで、一応避難して安全を確保したあとで、群れの中の大きくて強いオスサル（特定の「ボス」サルに限らないらしい）が一策を施す。木からおりて野犬を別のところへおびき出すのである。著者自身もよくこれにひっかかったらしい。そのサルの後をついていくと、いつのまにかサルの気配が感じられないところへつれていかれたそうである。

これは1例だが、このようにして伊沢氏は、これまで確立されてきたニホンサル社会の、ほとんどあらゆる定説をすべて否定していく。とは言っても、これまでたくさんのサル研究者がこくめに調べて、順位がありリーダーを見たのは、たしかな「事実」である。先人たちは、まさかウソをついていたわけではあるまい。まあ、学者というものは、ウソをつくことが好きで、かつうまいことは、「学者」の1人である私が保障してもよいが。伊沢氏は、それは顔づけされたサルの群れにあらわれた特殊なものであろうと言う。餌場にうず高く、おいしい餌が積み上げられる。すると、群れの中の強いサルがそこへ行き、力づくで他のサルをよせつけない。集中した餌という、人間がつくり出した条件の下で、サルの中の強い弱い、目に見える形で現われてきたのである。山の中で、野生で暮しているサルは、そんな1か所に積み上げられた餌など知らない。山の餌は、木の裏でも木の裏でも、広く散らばって存在している。強いサルも弱いサルも、それぞれ自分の気に入った木にのぼり、かってに餌を食っている。餌をめぐるけんかのいわれはないのである。木の裏がたくさんなれば、強いサルも弱いサルも、オスもメスも、大人も子供も、みんな腹いっぱい食べて満足し、雪に閉じこめられるとみんなが飢えをがまんする。いくら最強

の“ボス”だと威張ってみても、ない顔は奪うことはできない。

そういえば、1番（ボス）から最下位まで、1列に順番がついているという有名な「順位制」も、2頭のサルの間にミカンやピーナッツを投げ、どちらがとるかという手続を経て、はじめてわかったことである。ミカン・テスト、ピーナッツ・テストという。いつだったか学生が、人間生態学をやってみたいと言ったので、「生物学科教官の順位制」というテーマを出したことがある。教官が2人いるときをみはからって、その間に何か投げてみるというわけである。ところが、サルとちがって人間では、投げる「もの」が難しい。食べ物ならだれ、ウイスキーならだれ、と、あらかじめ結果がわかってしまう。教官の間の順位を、本当に示すにはなにがよいかを討論した結果、それは研究費だろうということになった。でも、それをやろうと思ったら、あらかじめ生物学科の全研究費をとりあげなくてはならぬ。この大研究はここでつまづいて、遂に実現できなかった。もっとも、そんなテストをしなくても大体わかっているけれど。

どんな生き物でも、個体の間には強があり、強いものと弱いものがある。その強弱を示さざるをえなくなるような条件を人間がつくれば、順位ができてしまうのである。

この本を読んでいくうちに、私は著者に大変共感を覚えてきた。誤解のないように断っておくが、決して好きになったわけではない。元京大応援団長であり、自分の結婚式のとき、みんなの拍手がばらばらだといって、自ら音頭をとってやりをおしさせたという神話のある人物である。あまり近づきにはなりたくない。共感を覚えたのは、私もかつて魚で同じようなことをやっていたからである。魚でも4〜5匹いっしょに小さい水槽に閉じこめると、けんかをはじめ、強い弱いがきまり、順位ができる。そして中には、魚の群れには「順位制」がある、サルといっしょや、などと行き過ぎる学者も多かった。海に潜って魚の群れを見ていた私には、魚の群れに順位制があるなどということは信じられなかった。たくさんの魚が集まってみんな仲よく泳いでいるだけで、けんかなどおこらない。その上、魚の群れには数千から数万におよぶ大きなものがあり、たとえば1万匹のサバの群れに、第1位から第1万位までの順位が決まっている、などと、真面目に言う人はまずおるまい。どうも魚の順位制は、水槽に閉じこめて人間がつくり出したものではなかろうかと考え、魚の群れには順位制がないということを実証しようとした。ところが何事によらず、あるという証明は簡単だが、ないという証明は難しい。どういうわけか私に敵意をもっているある生態学者がいて、「あの男はここ8年、一種の科学論文も書いていない」と、ある雑誌に書いた。でも、それを証明するためには、その8年間に出版あらゆる科学雑誌をすべて調べるなくてはならない。「そんなことやってるはずがない」と、私がある学生にいうと、彼は「そんならあれはまちがいですか」と聞いた。「うん、まちがいや。僕はここ12〜3年書いてないからなあ」

それはともかく、非常に苦勞して、魚の順位制を否定したことがあるので——その間の詳細を

万が一知りたい人があれば、私の「磯魚の生態学」創元新書、を読んでいただきたい。10年前の本だから、今よりは少し真面目に書いてある——、伊沢氏のこの本に共感をもったというだけの話である。もっとも、私は、順位制は魚にはないがサルにはあると思っていたので、その本にもそう書いたが、この点では少々困っている。でも、ないものはしょうがない。そのうち、ないしよで訂正しておくことにしよう。

さて、けんか好きのサルが、1つの群れにまとまるためには、順位制やリーダー制が必要なのだ、というわけであった。その順位制をなくしたら、それに代わる、サルの群れのとりまとめ法を考えなければならぬ。伊沢氏は、それは同時に生まれ、いっしょに成長した、同世代の「仲間意識」ではないかという。仲間意識などという、すべてを数量化せずにはおさまらぬ近代生態学者からまた怒られそうだが、私には大変よくわかる。生きものなんて、みんなそんなものではなからうか。水族館にいたころ、数種類のチョウチョウオをいれた水槽で、たった2匹のフウライチョウチョウオが、他の種には目もくれず、その2匹の間だけでけんかをくりかえしていた。そんなにきれいならはなれていたらいいのに、彼らは1つの小さな石の両側にそれぞれ居をかまえ、たえず出合ってたえずけんかしていたのである。

サルはたしかによくけんかする。しかし、相手を殺してしまうようなけんかはしない。「けんかはよいことです。けんかすればするほど仲良くなります」と言ったのは毛沢東だが、人間の世界にも夫婦けんかというものもある。サルの群れに、順位制がなくとも、ボスがいなくとも、群れがばらばらになるといって心配する必要など、ないのではあるまいか。

かくも無惨に中心概念を破壊された日本のサル学は、これからどうするのだろう。伊沢氏は読売新聞の記者にきかれて、こう答えている。「今西先生には、そんなこと言ったらいままでのサル学は全部ダメになる、本が出たら文句を言うぞといわれています。」（読売、1982年3月8日）。今西先生の反論は楽しみだが、近代的サル学者の大半は、おそらく沈黙を守るだろう。彼らは、データと数字で反論しなければならず、そのためには、少なくとも冬の白山を15年以上走りまわらなくてはならないからである。

(奥野良之助)

「生物学誇大事典」

「こんちゅう」：節足動物門・こん虫綱に属する雑多なムシ類。体は固いキチン質におおわれ、他からの忠告は全く受けつけない。そのくせ内部には骨格がなく、特にバックボーンは根柢すらないので、ほんのわずかな間といえども節操を保つことはできない。一応脳らしきものは頭部に存在するが、胸部や腹部にも大きな神経節を持ち、その思想は分裂していることをもって本質としている。インマチュアの時代が非常に長く、一生の大半を占めるものが多い。また、よく食べて成長するのはインマチュア時代であり、マチュアすると成長はとまり、卵を産んで死ぬだけの存在となる。かつては石炭紀のトンボのように大きいものも現われたが、その後小さくなる一方であり、こまかなすき間にはいりこんでこまかく分かれ、種類数だけは、全動物の80%、80万種を越えるほど増えた。とはいっても、その基本形態はほとんど同一で、頭・胸・腹に分かれ、足が6本、羽根が4枚ある。毛が1本多いとか、ヒゲが生えているとかいった、どうしてもよいようなことで他を区別しているにすぎない。英語でインセクトというが、これは「セクトの中に閉じこもる」という意味であり、セクト主義者は大いにこれを好むが、ノンセクトはそれこそゴキブリの如く忌みきらう。それでもかくのごとく繁栄しているのは、その無節操の故であろう。ちなみに、金沢大学理学部生物学科では、こん虫学科ではないかと思われるほどはびこっている。

※ 日本生物学会ではこのたび、「生物学誇大事典」を編集することになりました。生物にはもちろん人間もはいますから、どんな項目が出てきてもすべて収録します。また、すべての事象にはさまざまな解釈が可能ですから、同じ項目が何回出てきてもかまいません。この世紀の大事業に、すべての会員が参加するよう呼びかけます。

(日本生物学会誌 編集局)

「日本生物学会」 設立趣意書

なんにも目的はないけれど、「日本生物学会」なるものをつくろうと思う。動物学会や植物学会はあるが、日本にはまだ、生物学会と称するものはない。しいていえば、それが設立の動機である。

会の目的はないが、事業はおこなう。

その一つは、会誌の発行である。これを「日本生物学会誌」と名づける。刊行は不定期とし、原稿が集まり次第発行する。したがって、原稿が集まらなければ、永久に発行しない。内容は、会の名称にふさわしいものとする。ただし、「生物」には当然人間も含まれる。たとえ天文学でも、もしそれを人間がやったのならよいことになる。また、「日本」生物学会であるので、日本語以外は受けつけない。受けつけた原稿は、無審査・無修正のうえ、無責任に掲載する。

第二の事業は、「大会」である。年一回金沢において開く。大会は、しゃべりたいものがしゃべり、聞きたいものが聞くことによって成立する。したがって、しゃべりたいものがいなければ直ちに解散する。（聞きたいものがいなくても同様である）二次会はさまたげない。

会員の資格は「非教授」とする。要するに、教授以外であればだれでもよい。もっとも、教授以上の社会的地位の方は、おことわりすることがある。

会員の義務は、会費をおさめること、及び、会費の行方について、深く追及しないことである。会費は当分の間、定職についているもの年1000円、定職なきもの年100円とする。善意の寄付はこれをこぼさない。ただし寄付しても、何の特典も与えない。

会の「管理・運営」は、当分の間、会長の独裁とする。会員は会長に対し、団交権を持つ。したがって、総会は開かない。団交は文書でおこなってもよい。

本部は、金沢市丸の内1の1 金沢大学理学部生物学教室 生態学第一研究室 におく。連絡はすべて本部あてにおこなうこと。

各地に支部を設立することが望ましい。支部長は自称すれば直ちに発効する。支部の管理運営は支部長の独裁とし、本部は一切関知しない。

以上の趣旨に賛同の方は（あまりいるとは思わないが）、あるいは賛同しなくとも、同封のカードに氏名・住所・電話番号をかき、会費を同封して、本部まで送られたい。会誌の発送をもって受領書にかえる。原稿がなければ永久に出ないことを御了承のほどを。

1977年5月26日の佳き日に

会長 奥野良之助

< 会 則 追 記 >

教授もしくはこれと同等の社会的地位にある者で、どうしても入会を希望するものは、“不名誉会員”とし、会費2000円を徴収する。

学部長、学長もしくはこれに同等な社会的地位を有する者で、どうしても入会したい人は、“特別不名誉会員”とし、会費4000円を徴収する。

現普通会員も、出世したときは、これらに準ずる。

会費の送金は、郵便局の下記振替口座を利用するのが、最も安上り（1回15円）である。もちろん切手でもよく、100円を書留にして350円かけて送ってもらっても、当方は一向に差支えない。

金沢 40763 日本生物学会

日 本 生 物 学 会 誌 投 稿 規 定

- 1 日本語に限る。
- 2 漢字はなるべく当用漢字に限ること。タイプの括字がない時は、勝手にカナにかえることがある。
- 3 原稿の長さの制限はしない。ただし、1号は100枚（400字づめ）しかはらないので、適宜分割掲載することがある。
- 4 形式・内容とも、全く自由とする。読む・読まないは読者の自由であるから、読者のことなど考えずに書けばよい。
- 5 匿名、変名、ペンネーム、いずれも可。もちろん本名でもよい。
- 6 いずれの場合も、肩書、所属などは不要。
- 7 寄稿者には本誌5部を進呈する。別刷のほしい方は、原稿にその旨誌しておくこと。
- 8 図、写真も可。ただし写真はおそらく、何が何かわからなくなるものになる。

1982年8月 改訂

(1977年7月の第1号35ページ
記載の投稿規定は、廃棄処分とする)

<< 編集局 だ よ り >>

どういふわけか前号からひと月もたたぬうちに出来てしまいました。原因は「もくじ」を見ていただくとうすぐわかると思います。前号の多彩な顔ぶれから一転して昔のパターンに逆もどりです。好ましくない事態ですが、名ばかりで権限の伴わない私にはいかんとも仕様がありません。

今度金沢大学で「あけがらす文庫記念講演会」というのがありまして、講師に日本生物学会不名誉会員である S 教授と会長および N 助教授（来春不名誉会員への降格並びに本部金沢からの都落ちが決定している）が予定されています。ついでに客席の方も当学会員で占領して、日本国政府の後援による日本生物学会（誌500ページ突破記念）大会にしてしまおうとひそかに計画中です。

局長：どういふ理由でこのメンバーになったんですか。

会長：Sさんがひきうけてきて、オレにも出るいうてきけへんのや。もう1人要る言うから、Nさんで間に合いまへんか言うたら、ほんまになってしもた。

局長：テーマは何ですか。

会長：聞いて驚くな。「冒険と探究」いうんや。副題が何と「学問をささえるもの」。

局長：会長はこの間、ソフトボールのピッチャーしてて、ゴロがきたらとんで逃けたそうですね。

N先生はガスコンロによう火をつけんそうやし、冒険とは関係ないのんとちゃいますか。

会長：学問の冒険いうたらそんなもんやない。たとえば、教授を言い負かすとかね。君ら学生でもそうやで。教授に逆らう冒険をおかさんことには、ほんまの探究はできんことになってる。

さてどんな講演会になることやら。冒険心と探究心にあふれた方はぜひ聞きに行ってください。

(編集局長)

日本生物学会誌 第14号 1982年10月25日

編集・発行 日本生物学会

金沢市丸の内1の1*

金沢大学理学部生物学教室

生態学第1研究室内

編集無責任者 奥野良之助

許可無断転載